締水まちづくり協議会
たより
平成26年1月20日
締水まちづくり協議会
91号

絆作り・設計図作りから まち創りへ

締水まちづくり協議会
会長　葉山　和則

皆様、新年おめでとう御座います。お陰様で会長の1期2年を無事終える事が出来ます。これも　ひとえに皆様の協議会運営に対するご理解、ご協力、ご尽力の賜物と厚く御礼申し上げます。

さて既にご案内の通り本年から、従来よりの〈絆作り事業〉に加え　昨年ご協力頂きましたアンケートを基にした、地域の「将来計画」の策定、即ち〈設計図作り事業〉に本格的に取り組んでおります。会員の皆様には既にアンケートの提出という形で設計図作りに参画頂いている訳ですが、さらに一歩踏み込んで「テーマ別分科会への参加」と言う形で、より具体的に、専門的に議論を深めて頂きたく、会員の皆様から「分科会委員」を募集しております。我々の地域を我々自身で創り挙げて行く為に知恵を出し、汗を流して、より良い設計図を作ろうではありませんか。応募は、自治会を通して、あるいは、直接まちづくり事務局又は市民センターにお名前と連絡先をお知らせ頂くだけで結構で御座います。（応募要項等は、協議会事務局までお問い合わせください）お待ちしております。

一方、平成27年4月からの、将来計画（設計図）の実践に伴う課題の把握や問題点の抽出、さらにその解決方法の策定等を行い、実行計画に反映させながら各事業を実施していく――、即ち〈まち創り事業〉の本格的な開始に備え、その実行部門の仕組み、組織を整備し確立させねばなりません。その為には絆づくり事業を中心に活動してきた、部会を〈絆づくり事業〉と共に〈まち創り事業〉の実行部門としての機能をもつ体制にする必要が有ります。新しい人材が積極的に部会メンバーに加わって頂く事により、部会の機能充実と活性化を図って参りたいと考えております。

この様な観点から、本年は「元気で　仲良く　楽しいまち創り」の実行基盤を固める重要な年となります。如何に良い設計図が描けてもこれを形として創り上げる実行部門が機能しなければ文字通り　絵に描いた餅に終わってしまいます。今こそ「元気で　仲良く　楽しいまち」を「みんなで創る」為に〈絆作り事業〉で培った「信頼・助け合い・思いやり」の精神で「協力・協調・協働」する時であります。この様な視点から、まちづくり協議会の会長として出来る事、やらねば為らぬ事に取り組んで参りたいと思います。会員の皆様のご理解とご協力、ご尽力をお願い致しまして年頭のご挨拶に代えさせて頂きます。

二月・三月の行事予定

第2回教育講演会	2月23日(日)10:00～ 櫛田地区市民センター1階ホール
健康講座	2月24日(月)10:30～12:00 櫛田地区市民センター
春のじゃがいも苗植え	3月15日(土)13:00～ 清水JA倉庫集合

みんなで凧をあげよう!!

一月5日、山下運動公園に、大きな凧・小さい凧・たくさん連なった凧が、快晴の大空に揚がり、多くの参加者（二百名余）の笑顔が見られました。又、「凧をあげよう」に先立ち12月26日に、凧作り教室が開かれ、23名の参加者が、支援隊の皆さんに指導していただきオリジナルの凧作りをして、その凧も揚げられ盛大でした。

参加者の方々は支援隊女性の振舞いの汁粉で身体の中から温まりました。　又、安楽町自治会の皆さんに設置して頂いたスロープのおかげで事故もなく無事終了する事ができました。

健康なまちづくりシンポジウム in まつさか

一月13日に嬉野ふるさと会館で開催されました。地域医療振興協会の岩室紳也さんが「住民力で健康なまちづくり」の題で基調講演されました。高血圧，8020（80歳で20本の歯を残す）、メタボの例を挙げて、大切なのはかかわり、つながり、ささえあう環境や居場所であり、それがないとリスクが大きくなる。健康には人と人の繋がりが大切であることを述べられました。

その後のパネルディスカッションには締水から葉山和則さんと野中典さんがパネラーとして締水の取組について発表されました。はつらつクラブ10名をはじめ多くの方にも参加して頂きました。

四国八十八ヶ所霊場歩き遍路物語（三十二）

豊原町　岩塚　章

今治の各お寺をお参り　石鎚山めざして

五十八番仙遊寺、霧の中下山、六・七キロ先の五十九番国分寺へ。お参り終えて次のお寺六十番横峰寺へ。いや順路の関係から六十一番香園寺へ。九キロの道程。今日の歩きは十五キロのやや楽な歩きである。早々三時過ぎにお寺に。このお寺には子安大師も祀られている。明日は第六十番横峰寺へ。高い山七四五メートルの山中に建立されている。明日の昼弁当をと街に出た。コンビニでいなり寿しを求め、八時過ぎ、夢の中。五時に起床。いつものテープ巻きも入念に。六十番までは山また山。上りまた上り九・五キロ。そして昨夜泊った香園寺に山また山。下りまた下り九・五キロ。帰り着いた連泊の寺にガタガタになった足を湯に沈めて夜眠りに。

人間ってやれば出来る。いや何としても宿に着かなきゃ朝には仏さんになっているかも。這いずってでも今夜の宿に。この悲壮な思いがあるから歩ける。「お遍路さん無理せずもう少し近い所で泊ればよいでしょう」いやそれが出来たらそうしたい。だが四国お遍路道、何としても途中に宿が無い所が二、三ヶ所あるのです。その一つが六十番横峰寺へのコース。途中山ばかり宿が無い。よほど覚悟して出発しないと、これが歩き遍路本当の姿でありましょう。前々からこのコース気にしながら、いや苦にしながら来たけれど何とか乗り切ることが出来た。明日からは一・五キロ進んで六十二番宝寿寺。一・五キロ歩いて六十三番の吉祥寺。三・三キロで神前寺。十時には各お寺参り終えることが出来た。いよいよ六十五番の三角寺まで四十五キロ。途中新居浜市のビジネスホテルに泊る予定で西条市を歩いていた。松阪駅から何としてもの急用電話が入り、JR西条駅から特急で岡山から新幹線で名古屋経由で松阪へ。真っ黒に日焼けした顔に田舎の皆さんにびっりされて一時家に戻った。

つづく

伊勢街道を歩いてみた⑥

奥田三角について多少は触れておかないと櫛田の住人としては名折れである。そこで、平成十五年（二〇〇三）四月三十日の夕刊三重（郷土研究三十三）に「儒学者奥田三角」が分かりやすく掲載されているので、要約してここに転載してみる。

《奥田三角（一七〇三～一七八三）江戸中期の儒学者。名は士亨（しこう）。元禄十六年豊原村に生まれる。十三歳の頃祖父の弟である柴田養正を師とした。養正に奨められ十九歳の時、京都の儒学者伊藤仁斎（一六二七～一七〇五年）の長子伊藤東涯（一六七〇～一七三六年）に就いて儒学を修める。三角は、仁斎の開いた塾「古義堂」で十年間学んだとされている。「古義堂」は京都市に「伊藤仁斎宅（古義堂）跡並びに書庫として現存している。

一七三一（享保十六）年、三角は津藩の儒学者として仕え、藩主・藤堂高治・高朗・高悠・高嶷の四代の藩主に仕えた。

三角は、特に三角形を好み、晩年豊原の自宅に「三角亭」を造った。これが、「三角」の号の起こりである。「盈(み)つれば虧(か)く」（何事も頂点に達すれば、後は次第に衰えていくもの）として、四角より一辺欠けた三角の方が良い、常に驕りが無いようにと自分を戒めるようにしていた。その人柄から門人は八百人に及んだ。

【三角の先祖、豊原の名付け親】

先祖は、鎌倉初期の武将近江源氏の佐々木高綱の子孫で江州奥田庄（現在の滋賀県）を治めていた奥田晴重である。後に越前豊原（現在の福井県）に移った。九代目の奥田清十郎忠重の代に、一族は櫛田川のほとりに住み、開拓してこの地を「豊原」と名付けた。》

（注：締水まちづくり協議会たよりNo.37号にも、「豊原と言う地名の由来について」を地元の藤木篤さんが寄稿されている。）

櫛田川のことを「締水」と奥田三角が呼んだという。

忠重の孫吉久のとき一六三一（寛永八年）年に、津藩主藤堂高次に大庄屋を命じられ、代々それを継いだ。三角は十四代に当たる。

三角の死後、孫の恕堂が家督を継ぎ、三角と同様に京都の「古義堂」で学び一七八八（天明八）年津藩に儒学者として召し抱えられる。

恕堂は、困っている人を見ると放っとけない性格で、伊藤東涯の孫・東里の代で伊藤家が窮乏に貧しているのを見て、七年間仕送りをして家計を助けたという。その後も代々学者を輩出した。

ところで、豊原天王の交差点から枕山の三角の墓碑まで目印が無い。子孫の方がみえるなかで、どうこうする事もできないがちょっと残念に思う。

奥田三角一族の墓碑を後にして、県道との交差点豊原交差点まで行った。左側に櫛田郵便局がある。この辺りに豊原組大庄屋奥田家があった。

豊原組大庄屋（昭和56年撮影　松阪市史資料室提供）

「締水地区の日」は
2月19日（水）
当日のみ有効
この案内と1,000円以上お買上げの方に
20ポイントプレゼント
Aコープくしだ
営業時間 10時～21時（日曜日のみ9時オープン）
デイリー、畜産部門パート募集中